

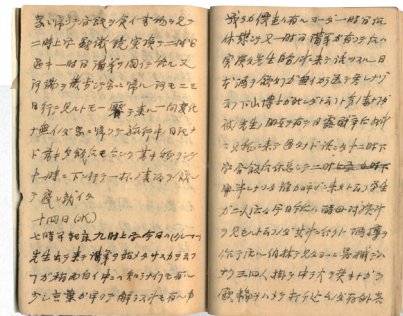
京都大学 大学文書館だより

Kyoto University Archives Newsletter

第26号

目次

- | | |
|--|--|
| 京都帝国大学・第三高等学校の
朝鮮人留学生
水野 直樹 …………… 2 | バーコードを利用した法人文書管理
システムの導入
坂口 貴弘 …………… 9 |
| 米国のミュージアム・アーカイブズを訪ねて
筒井 弥生 …………… 4 | 日誌 …………… 10 |
| 企画展紹介：京大教員たちの留学体験
—明治・大正期を中心に—
坂口 貴弘 …………… 6 | ホームページをリニューアルしました
…………… 11 |
| 公開資料紹介：室賀信夫関係資料
西山 伸 …………… 8 | 学徒のテロル—血盟団事件余聞—
福家 崇洋 …………… 12 |



松本均（1873～1950）は京都帝国大学理工科大学助教授時代の1910年から1913年まで欧米諸国に留学した。左は1912年8月に滞在したドイツ・ガイゼンハイムで撮影された集合写真。前列向かって左から3人目が松本。右は留学中に松本が付けていた日記で講義の様子が書き込まれている。（6～7頁参照）

京都帝国大学・第三高等学校の朝鮮人留学生

京都大学人文科学研究所教授 水野 直樹

京都大学の前身である京都帝国大学と第三高等学校は、現在とは異なる意味で国際化していた。日本の植民地である朝鮮や台湾、あるいは中国（中華民国および「満洲国」）から多くの留学生が勉学のために来ていたからである。さらに戦争末期にはインドネシア、ビルマなどの「南方特別留学生」も受け入れていた。

これら留学生の存在は京大の歴史においてそれなりの位置を与えられてよいと思われるが、それに関する調査研究はほとんど行われていない。本『だより』第10号に伊藤孝夫氏（京都大学大学院法学研究科・法学部教授）が「京都帝大の朝鮮人学生」を寄せているが、留学生数など基礎的な事実についてかならずしも充分なものとはいえない。どれくらいの留学生がいたのか、彼らはどのような人々であったか、卒業後にどのような活動を行なったか、などを明らかにすることによって、戦前京大における留学生の歴史的意味を考えることが必要であろう。

2010年に韓国の鄭鍾賢氏（成均館大学 HK 教授）^{チョン・ジョンヒョン}を外国人共同研究者として受け入れた際、京都帝大の朝鮮人留学生について基礎的な調査を共同で行なった（その成果は成均館大『大東文化研究』第80号に掲載）。私はそれ以前に三高の朝鮮人留学生について調べていたので、それらをもとに簡単に紹介しておきたい。

留学生の概況

京大卒業者名簿によれば、1911年から45年までの朝鮮人卒業者は236名である（うち1人は法学部の政治経済学科と法律学科を卒業）。10年代4名、20年代38名、30年代126名、40年代69名で、30年代に留学生が増えたことがわかる。

しかし、この数字は京都帝大の朝鮮人留学生数を正確に反映したものではない。という

のは、京都帝大には「選科生」や「専修科生」（医学部）など非正規の学生がいたり、さまざまな理由で中途退学する学生がいたりしたからである。このように何らかの形で京都帝大に学んだ者の名前を知るには、『京都帝国大学一覽』各年版から在学生の名前を拾い上げるとともにその他の資料を参照する必要がある。

こうして作成した名簿によれば、正式卒業者以外に170名の朝鮮人が京都帝大で学んでいたことがわかる。合わせて406名となる。他の大学の朝鮮人留学生についての調査が進んでいないため比較が困難だが、帝大のうち最も多くの朝鮮人留学生を受け入れたのが京都帝大だったといえそうである（東京帝大の場合は1938年までの卒業者が77名、九州帝大は45年までで162名となっている）。

正式卒業者について京都帝大入学前の出身校を見ると、約8割が高等学校卒である。一高から八高までのいわゆるナンバースクールより八高以降に開設された山口高、山形高、佐賀高などの出身者が多い。師範学校や専門学校出身者はそれほど多くないが、目を引くのは朝鮮の水原高等農林学校出身者が11名となっていることである。水原高等農林出身者は九州帝大農学部^{スウォン}に留学するケースが多かったことが知られているが、京都帝大農学部も水原高等農林との間に何らかの特別な関係があったものと推測される。

学部別の卒業者数では、法学部が102名と最も多く、経44名、農31名、工22名、文16名、医13名、理8名の順である。ただし、医学部の場合は「専修科生」を含めると80名近くになる。これは朝鮮のセブランス医専や京城医専を卒業した者がさらに知識・技術を磨くためにやってきたからと思われる。

三高の朝鮮人留学生については京都帝大ほど記録が残っていないが、1917年から37年までの卒業者43名、37年から41年までの

在学生 28 名、合計 71 名の名前が判明している。当初は日本「内地」の中学校を経て三高に入学する者が多かったが、次第に朝鮮の中学校または高等普通学校(朝鮮人のみの学校)を卒業した後、三高に入学する者が増えた。これは朝鮮内での日本語教育が強化されたこと、日本人が通う中学校に入る朝鮮人もわずかながら増えたことなどによるものと思われる。三高を卒業した後は、京都帝大、東京帝大に進む者が多かったと思われる。

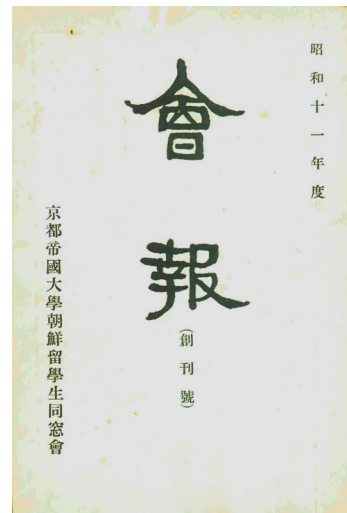
留学生の活動

京都帝大、三高在学中の朝鮮人留学生がどのような勉学生活を送ったかを明らかにすることが必要だが、ここでは在学中の活動について触れておこう。

朝鮮が日本の領土であったといっても、留学生を送る朝鮮人にとっては京都も異郷であったことは間違いない。言語や社会、生活様式など多くの点で困難に直面する場合も多かった。そのために留学生同士の親睦・交流、相互扶助を目的に留学生団体が組織された。1915年に法学部学生金雨英キム・ウヨンが中心になった京都朝鮮留学生親睦会がその始まりである。警察の記録では、20名ほどの学生が隔月に会合を開いたとされている。京都帝大だけでなく他の学校で学ぶ朝鮮人留学生が集まったものであろう。金雨英らは19年に雑誌『学友』を刊行した(創刊号のみ確認)。20年には京都朝鮮人留学生学友会に改称され、26年に機関誌『学潮』を出している。発行所は「吉田帝大寄宿舎」(現在の吉田寮)に置かれていた。

この学友会の時期には留学生運動が盛んに展開された。親睦を図り、お互いに助け合うにとどまらず、朝鮮民族として解決すべき課題に取り組むという姿勢を見せたのである。たとえば、25年に朝鮮人暴動を想定して行なわれた小樽高等商業学校の軍事教練に対する抗議活動などを在日朝鮮人労働団体とともに展開した。このような活動の中から社会運動、共産主義運動に関わる留学生も現われた。

京都帝大で学ぶ朝鮮人留学生が増えた30年代には、京都帝国大学単独の朝鮮留学生同窓会が組織され、36年から毎年『京都帝国大学朝鮮留学生同窓会 会報』が発行された



(写真は創刊号)。この会報には、在学生(通常会員)のみならず卒業生(特別会員)も文章を寄せ、卒業生の名簿や消息も掲載されている。京都帝大で学んだことは彼らにとって大きな「財産」と考えられていたのであろう。

『会報』は第4号まで朝鮮語で印刷されたが、第5号(40年)、第6号(41年)は日本語となった。また第4号から団体名が「京都帝国大学朝鮮学生同窓会」に変わっている。警察当局が朝鮮語での刊行を禁じ、朝鮮から学びに来る者は外国からの「留学生」ではなく単に「学生」としなければならぬと圧力をかけた結果であった。

戦時中はこのような圧力を受けながらも、朝鮮人留学生同士の結びつきは途絶えることがなかった。1943年、京都帝大文学部で西洋史を学んでいた宋夢奎ソン・モンギュが従兄弟の尹東柱ユン・ドンジュ(同志社大学英文科)とともに朝鮮独立運動の容疑で検挙される事件が起こったが、その際も他の留学生が検挙・取調べを受けている。また戦争末期には、京都帝大助教授(のち教授)だった李升基イ・スンギ(化学研究所)、李泰圭イ・テギョ(理学部)などを中心に留学生の集まりが持たれていた。日本敗戦直後、京都の朝鮮人留学生運動がきわめて活発だったのは、そのような背景があったのである。

京都帝大、三高で学んだ朝鮮人がその後の人生でどのような歩みをしたのか、大学・高校側が留学生に対していかなる認識と姿勢を示していたかなど、明らかにすべき課題はたくさん残っている。

米国のミュージアム・アーカイブズを訪ねて

一橋大学大学院言語社会研究科非常勤講師 筒井 弥生

はじめに

米国のミュージアム（美術館・博物館）の多くは、その管理運営の記録や展覧会等の記録を保存し、利用に供するアーカイブズを併設しています。あり様も利用方法もさまざまですが、これまで私が見学したなかから、スミソニアン協会、シカゴ美術館、ゲティ・センターのアーカイブズを紹介しましょう。

◎スミソニアン協会（2010年夏に訪問）

スミソニアン協会のインスティテューション・アーカイブズは、1891年創設、協会の公式記録と協会の歴史にまつわる個人資料、特別コレクション、オーラル・ヒストリーなどを収蔵します。2006年に大規模な引越を終えたばかりでした。協会の管理部門に属し、協会内各部署の記録管理を支援し、説明責任を果たすことも大切な仕事としています。写真センターと合併し、知財関係の管理や資料のデジタル化も進めています。保存修復の専門家、レファレンスに対応する専門家もいます。アーカイブズ資料の閲覧スペースも整備され、平日の午前9時から午後5時まで開いています。

インスティテューション・アーカイブズが、スミソニアン協会全体の記録管理・アーカイブズ管理にあたるのに対して、協会傘下の14のミュージアム・アーカイブズと協会図書館それぞれにアーカイブズ資料があります。各館とも独特のアーカイブズ活動を行っています。そのひとつ、東洋美術館であるフリーア美術館とアーサー・M・サックラー・ギャラリーのアーカイブズには、日本に関するコレクションも多数あります。収集基準は、東洋美術に関するもの、フリーア氏に関するもの、館の活動に関するものです。フリーア&サックラーのアーキビストによると、インスティテューション・アーカイブズと自館との二重の傘下にある形で複雑だが、自らは

小さいけれど、修復などは協会全体の大きさのメリットを享受している、とのことでした。見学会で地下にあるアーカイブズに案内されたときには、和紙で修復した資料や前年に取得したアリス・ルーズベルト・ロングワースのコレクションから西太后、李王朝皇太子そして明治天皇・皇后の署名入り写真やアルバムを見せて下さいました。それ以来、写真の同定作業などのお手伝いを、宮内公文書館の資料他を調査して行っています。このコレクションの調査を目的に、中国・韓国から熱心な研究者が訪れるそうです。デジタル化資料は、誰でもタグ付けができます。どうぞみなさまの知見もご提供ください。日本語歓迎のことです。

アリスのコレクション <http://collections.si.edu/search/results.htm?q=fsa+a2009.02&tag.cstype=all>

明治古写真 <http://collections.si.edu/search/results.htm?q=fsa+a1999.35+lyman&tag.cstype=all>

◎シカゴ美術館（2011年夏に訪問）

シカゴ美術館のアーカイブズには、展示スペースが広くあり、また閲覧室も充実しています。そこからスタッフの活動の場である地下に下ります。アーキビストたちは窓のない環境を嘆いていましたが、資料群のすぐ近くで作業している印象を受けました。創立時からの美術館の管理運営資料（運営母体の議事録や通信、財務記録、報告書、館作成の様々な媒体の記録物や出版物など）、展覧会など学芸部門の記録、図書館・アーカイブズの記録、美術館教育の記録、そしてレジストラが管理する記録（とくにコレクション記録には関心が高い）など美術館ならではの資料が多数あります。美術館併設の美術学校の資料も収蔵し、卒業生のウォルト・ディズニーが写っている集合写真も見ました。美術館に関

係する組織や個人の記録も所蔵しています。修復室では、革装本1冊ずつに中性紙のカバーを作成したり、和紙を用いて修復するところを見学しました。別室では、シカゴ美術館が豊富に所蔵する建築資料から、設計図面やデザイン図など特長ある資料が展示され、担当者からの説明がありました。

アーカイブズは、図書館の開館時間であれば、すべての来館者が閲覧できますが、館の管理運営資料であるインスティテューショナル・アーカイブズの利用は事前の予約が必要です。

◎ゲティ・インスティテューショナル・アーカイブズ (2012年夏に訪問)

先に紹介したスミソニアン協会は、活動のかなりの部分を連邦政府からの補助金で賄っている公的機関です。対照的に、ゲティでは石油王ジャン・ポール・ゲティの遺産でつくられたゲティ財団が、ミュージアム、保存修復研究所、基金、そして研究所という4つのプログラムを遂行しています。ゲティ・インスティテューショナル・アーカイブズは、研究所の中にありますが、財団全体の記録を管理し、管理運営資料を受け入れ、目録を作成、保存公開しています。利用には、3週間前までの予約が必要です。検索手段は、別管理の作家資料などの特別コレクションと共通です。訪問時は、特別コレクションにドイツの独立キュレーター、ハラルド・ゼーマンの貨車数台分のアーカイブズ資料を受け入れたところで、いつもは基金を提供する側のゲティが、外部資金を利用して目録を作成していました。現在は順次公開されています。特別コレクションにもアーカイブズ資料がありますが、このように作家やキュレーターの個人資料であったり、ギャラリーの資料であったり、写真資料であったりで、外部から受け入れたものです。それに対し、インスティテューショナル・アーカイブズはあくまでその機関の管理運営資料を中心とした、内部のものです。ゲティは私立の機関なので、非公開の資料も数多くあります。しかし、一旦公開したものは、ずっと公開する、というポリシーがあります。

ここで案内をしてくださったのは、出張中

のアーキビストに代わって、ライブラリーのレファレンスの長の方。あとでグランド・ツアーと揶揄されるほど、閲覧室やその前室、いくつもの収蔵庫に、研究所専用の修復部門やデジタル化部門も見学しました。建築資料の修復担当の方にお会いし、図面の赤鉛筆に難儀していること、ゲティ・ヴィラの模型を持ち運びできるように工夫して、利用の機会を増やしていることなど、お聞きしました。アーキビストの方々には後日お会いし、今なおメールでの様々な問い合わせに快く応じていただいています。

おわりに

以上のような見学は、米国アーキビスト協会(以下SAA)大会に参加した折に実現しています。アーキビストという専門職仲間が連帯感を抱き、勉強中の人を応援するおかげです。SAAには、ミュージアム・アーカイブズ・セクションがあり、ミュージアム・アーキビストが集い、メーリング・リストによる日常的情報交換、ニューズレターの発行、ガイドラインやベスト・プラクティスの策定を行っています。

米国のアーカイブズは欧州に比べると歴史が浅く、だからこそ学ぶところが多くあります。経済事情から、自らの資産を見直し、活動に活かそうという趨勢にあり、アーカイブズの活動は大いに期待されています。また、予算獲得や勤務条件の厳しさ、目録記述の標準化や多様な媒体の保存方法、特にデジタル資料の取り扱いなど、日本のアーカイブズと共通の悩みもあります。

日本のミュージアムの成り立ちは、米国とは事情が異なりますが、「公文書等の管理に関する法律」第1条をみると、国のミュージアムの活動記録である公文書も国民共有の知的資源であると言えます。京都大学が自らのアーカイブズで、文書を保存公開し、活用しているように、ミュージアムにもアーカイブズが整備されるよう、これは国立公立私立を問わずに実現してほしい、と願っております。

企画展紹介

京大教員たちの留学体験 —明治・大正期を中心に—

京都大学大学文書館助教 坂口 貴弘

大学文書館では、2014年3月4日（火）から6月1日（日）まで、百周年時計台記念館歴史展示室において、企画展「京大教員たちの留学体験—明治・大正期を中心に—」を開催しています。

京都大学は、創立当初より多くの教員たちを海外に研究留学させ、最先端の学術成果の吸収や諸外国の大学・研究者との学術交流を重視してきました。彼らが留学先で見聞きし、経験し、学んできたことは、彼ら自身のみならず、京大における教育・研究のあり方に対しても直接間接の影響を及ぼしています。

この展示では、大学文書館に寄贈された松本均・元工学部教授の留学日記を一つの手がかりとして、明治・大正期の京大教員たちの留学経験とその背景を探るとともに、当館所蔵の法人文書や個人資料、写真、統計データに基づき、京都帝国大学の活発な国際交流活動の一端を明らかにしています。以下、その内容を簡単にご紹介します。

テーマ1 京都帝国大学の創立と文部省留学生

ここでは、明治政府による研究者海外派遣の制度と京大創立との関係を示す資料を展示しています。

東京の帝国大学に次ぐ2番目の大学の創設が決まると、そこで教壇に立つ教員の確保・養成が急務となりました。京大創立前年の1896（明治29）年、文部省は全国の直轄学

校等から20代、30代の研究者12名を京大の教員候補として選び、国費で欧米諸国に留学させます。彼らには最先端の学術成果の摂取とともに、研究書籍の収集、各国の大学の組織・制度調査といった任務も託されていました。

その結果、例えば1899年に設置された法科大学では、ドイツの教育システムの影響の下、ゼミナール制の導入による教員・学生間の相互啓発の重視、科目選択の自由化などの新機軸が打ち出されています。

テーマ2 留学先の選択と渡航

ここでは、文部省留学生の留学先選択の傾向とその変化を探るとともに、ちょうど100年前の第一次世界大戦勃発の際、ドイツに滞在していた京大助教授・河上肇に関する資料等を展示しています。

京都帝国大学の拡充にともない、海外へ渡航する研究者の数は増加していきます。特に、分科大学（後の学部）や講座の相次ぐ新設を受けて、いまだ教授が着任していない分野を専攻する若手研究者に留学の機会が優先的に与えられました。

留学先はヨーロッパ諸国が全体の6割以上を占めており、なかでもドイツが最も多く選ばれています。この点は当時の日本の学問的傾向を反映しているといえるでしょう。欧州大陸が主な戦場となった第一次世界大戦を機に、アメリカへの留学生は増加していますが、

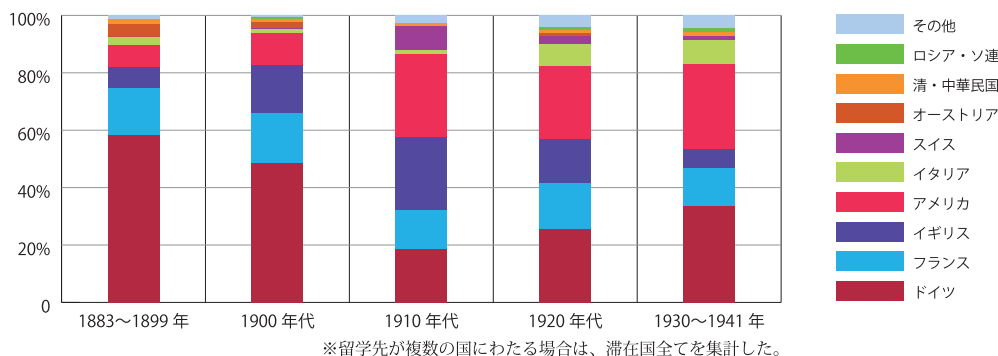


図1 留学先の変遷

非欧米圏への留学はごくわずかでした（図1）。

テーマ3 京都帝国大学助教授・松本均の欧米游学

ここでは、理工科大学助教授・松本均の留学日記や絵葉書を手がかりに、約100年前の欧米諸国を旅した派遣留学生の足跡を世界地図上に再現しています。

松本均（まつもと・ひとし、1873～1950）は福井県出身、東京帝国大学理科大学を卒業した後、1899年に京大最初の大学院生の一人として入学しました。製造化学陶器染洪法を専攻した彼は、1901年に理工科大学助教授に就任します。1910年、文部省外国留学生として欧米諸国への留学を命じられ、1913（大正2）年帰国すると直ちに理工科大学教授に昇任しました。以後、評議員や工学部長を歴任し、1933（昭和8）年退官しています。兄は学習院女子部長や宮中顧問官を歴任した松本源太郎、長男の松本誠は京都大学理学部教授を務めた数学者です。

松本均は3年間の留学中、ほぼ毎日、手帳に日記をつけていました（表紙参照）。その記述は日によっては数ページにわたる詳細なもので、訪問・滞在地の風景や日々の出来事を冷静な観察眼をもって綴っています。日記によれば、日本から約1か月半の船旅を経て到着した欧州では、ドイツの諸都市に2年余り滞在し、現地の醸造学校等で研究した後、イギリス、フランス、アメリカを歴訪しています。

テーマ4 在外研究の制度とその変容

今回の企画展にあたり、戦前の京大に在籍した教授・助教授の留学経歴を網羅的に調査しました。ここではその成果に基づき、留学時の所属や年齢、留学期間等の傾向を示すとともに、研究者の海外派遣をめぐる制度の変容を取り上げています。

戦前の京大教授・助教授のうち半数以上は、全国の大学等から年間数名のみが選抜される「文部省外国留学生」（後に「文部省在外研究員」に改称）として渡航しています。松本均のように、助教授になって数年たつと留学の機会が与えられ、帰国後すぐ教授に昇任するケースが多く、その意味で留学は研究者としてのキャリアアップの一条件であったといえる

でしょう（図2）。しかし、官費による海外派遣者は経費の関係から毎年若干名に限られており、派遣者の決定方法をめぐっては分科大学間で激しい議論になることもありました。

留学期間は次第に短縮する傾向にはあったとはいえ、1941（昭和16）年の中断までの間、京大からは計400名あまりの研究者が文部省外国留学生・在外研究員として派遣され、各国で研究に従事していました。

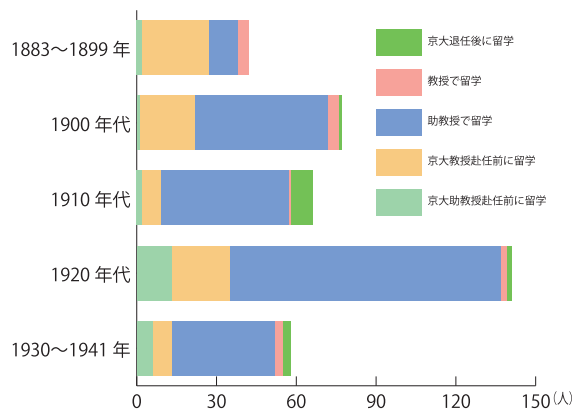


図2 留学時の身分の年代別推移

テーマ5 京都帝国大学の国際交流

明治・大正期の京大は、教員の海外派遣にとどまらず、外国人教師の招聘、学生の留学及び受け入れ、出版物の交換など多様な学術交流活動を展開していました。

創立から6年後の1903（明治36）年には、早くも最初の外国学生を中国から受け入れています。欧米諸国で開催される万国博覧会や国際会議には、京大の教員が出席する例が増えていきました。アインシュタインをはじめとする海外の著名な研究者による講演も京大で開催されています。

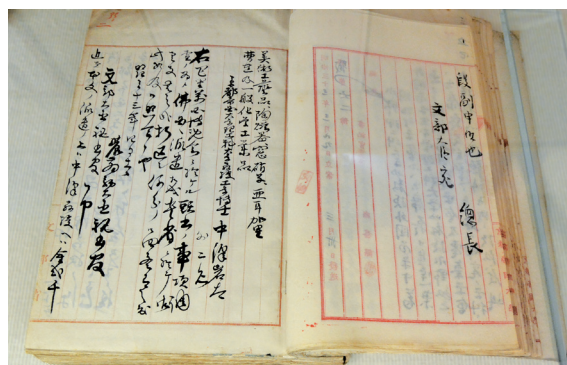


図3 パリ万博への教授派遣に関する照会

多くの方々のご来場をお待ちしております。

公開資料紹介

室賀信夫関係資料

京都大学大学文書館教授 西山 伸

大学文書館では、2013年3月より室賀信夫関係資料を公開している。本資料が大学文書館へ寄贈された経緯については、松田清「室賀信夫氏個人資料の寄贈」（『京都大学大学文書館だより』第8号、2005年4月）に詳しく記されているとおりであり、ここでは本資料の概要についても触れられている。しかし、本資料には特に戦時期の京大地理学の活動に関する重要な資料が含まれていることを鑑み、限られた字数ではあるが、改めて紹介の文を載せることとする（注1）。

室賀信夫は1907年東京生まれ、第三高等学校を経て京都帝国大学文学部に入学、1933年に卒業し、1938年京都帝国大学文学部講師、1943年助教授に就任した。専攻は地理学、当時の史学・地理学第二講座で小牧実繁教授とともに研究教育にあたっていた。在職中に健康を害し、敗戦後の1946年に退職、のち東海大学教授となり、1982年に死去している。

公開している本資料の点数は4991点、室賀の中学時代から死去までの時期の資料があり、点数として最も多いのは書簡である。また抜き刷り等の印刷物やノートの類いもある（注2）。

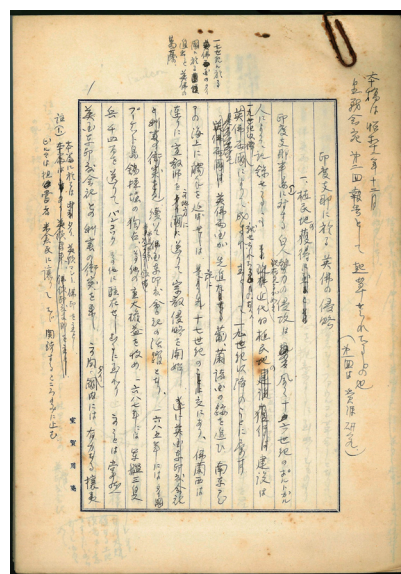
ところで、戦時期の京大を中心とした地理学者が総合地理研究会を組織し、参謀本部と密接な関係を持ちながら研究を行っていたことはよく知られているが、室賀はその有力な一員として同研究会に関わっていた。本資料にも総合地理研究会に関係する資料が含まれていて、例えば「印度支那に於ける英仏の侵略」（識別番号：室賀13-1、写真）は、室賀の下書き原稿と考えられるが、これは同研究会に深く関わっていた参謀本部の高嶋辰彦大

佐によって、参謀総長をはじめとする幹部に披露されている。この他、「『欧州戦乱に対処するタイ国の軍事経済上の指導概要』への卑見」（識別番号：室賀13-6）、「シンガポールの軍事地理的考察」（識別番号：室賀13-10）などの同研究会でまとめられたレポートと考えられる資料や、研究会の状況が分かる川上健三（京大文学部出身、高嶋大佐が指揮する国防研究室に勤務）からの書簡などもある。

京大地理学と戦争・軍との関わりについては、今後さらなる資料の発掘と研究が求められるが、本資料がその基本資料の一つであることは間違いないと思われる。

（注1）戦時期の京大地理学の活動と室賀資料については、小林茂・鳴海邦匡「総合地理研究会と皇戦会－柴田陽一「アジア・太平洋戦争期の戦略研究における地理学者の役割」の批判的検討－」（『歴史地理学』第50巻第4号、2008年9月）に詳述されている。

（注2）室賀家から当館に寄贈された資料には、この他に室賀が所蔵していた雑誌類がある。これらについても公開する予定である。



印度支那に於ける英仏の侵略

バーコードを利用した法人文書管理システムの導入

京都大学大学文書館助教 坂口 貴弘

大学文書館ではこのたび、総務部総務課と共同で法人文書の管理システムを改修し、バーコードシールとそれを読み取るハンディ端末を活用した方式を導入しました。これは2013（平成25）年度の全学経費の採択を受けて実施したものです。

京都大学の事務本部及び各部局では、保有する法人文書ファイルの名称や分類、作成年月日や所在等の項目を、学内の「情報公開システム」に登録して管理しています。このシステムへの登録が済むと、ファイルごとに「京都大学法人文書ファイル登録票」のラベルシールが発行されるので、これを当該ファイルの背表紙に貼付します。大学文書館ではこれらのファイルの移送を受ける際、貼付された「登録票」の情報等を手がかりとして、ファイルの現物と、情報公開システムから出力された非現用ファイルのリストとを照合しています。

しかし毎年度の移送作業では、法人文書ファイルの現物とリストとが一致しないケースも多くみられるのが実情です。これは、情報公開システム上のファイル名と現物の背表紙に記された標題とが異なる、システムに未登録のファイルが移送されてきた、「登録票」がファイルに貼られていない、等の原因によるものです。そのため大学文書館では、年間1万点以上にのぼる移送ファイルを1点ずつ確認していますが、これには多大の時間と労力を要しており、見落としやリストへの入力ミス等も発生していました。

そこで今回、情報公開システムを改修し、「登録票」のシールにバーコードを印字して（右図参照）、これをハンディ端末で読み取れるようにしました。バーコード化されたのは、法人文書ファイルに付与される「レコード識

別番号」の下8桁（図中の「コード」）です。あわせて、大学文書館が移送済みのファイルに貼る「識別番号」（例：13B12345）のシールや、館内書架の「排架位置」（例：1-8/1-2-3）を示すシールにもそれぞれバーコードを付与しました。これにより、「登録票」が貼付された法人文書ファイルについては、その情報を目視で確認・入力する作業が軽減され、照合の迅速化と正確性の向上が期待できます。

もっとも、バーコードを活用した新たな照合方式を本格運用するのは数年後からになりそうです。法人文書ファイルの大部分には5年以上の保存期間が設定されており、バーコード付きの新たな「登録票」が貼られたファイルが大学文書館へ移送されるファイルの大半を占めるようになるには、少なくとも5年を要するためです。したがって当面の間は、現行の照合方式を継続することになる見込みです。

また、情報公開システムに未登録のもの、「登録票」が未貼付のものについては、その後も引き続き目視による照合方式をとらざるをえません。これらの問題を解決するためにも、移送元の事務本部・各部局に対して法人文書管理のさらなる適正化を呼びかけていきたいと思っています。

2013/8/29	
京都大学法人文書ファイル登録票	
コード	00003361
分類	医総人 2303
自/至	1986/4 1997/3
保存期間	2001年度末
	

[日誌] (2013年10月～2014年3月)

- 2013年
- 10/ 3 大学文書館教員会議。
- 10/ 4 学外より、大幸勇吉に関する照会。
- 10/ 8 学内より、大学文書館所蔵美術品視察のため来館。
- 10/16 洛友会事務局より、洛友会関係資料寄贈。
- 10/17 学外より、小野兼次郎に関する照会。
- 10/17 朝日新聞社より、学徒出陣に関する照会。
- 10/18 学外より、森村茂樹に関する照会。
- 10/18 西山教授、工学部 1953 年度卒業生に展示案内。
- 10/21 学外より、滝川幸辰に関する照会。
- 10/24 西山、琉球大学法文学部歴史教育公開研究会「八重山で日本史を考える」において「大学って何をするとところ？ -近代日本の歴史から考える-」と題して授業（於・沖縄県立八重山高等学校）。
- 10/29 図書館機構、展示「博物学の世界」開催（於・百周年時計台記念館歴史展示室、～11月10日）。
- 10/30 三高同窓会より、三高同窓会関係資料寄贈。
- 10/30 京都大学医学研究科より、大学紛争関係書類寄贈。
- 10/31 『京都大学大学文書館だより』第 25 号発行。
- 11/ 1 毎日新聞社より、学徒出陣につき取材。
- 11/ 7 大学文書館教員会議。
- 11/ 7 NHK より、学徒出陣につき取材。
- 11/12 企画展「戦時期の京大 ～「学徒出陣」70年～」開催（於・百周年時計台記念館歴史展示室、～3月2日）。記者発表実施。
- 11/12 学外より、旧制高等学校校歌に関する照会。
- 11/18 学外より、学徒出陣に関する照会。
- 11/18 関西学生報道連盟より、学徒出陣につき取材。
- 11/19 西山、福家助教、学徒出陣関係者に聞き取り調査（於・奈良市）。
- 11/19 学外より、学徒出陣に関する照会。
- 11/26 名古屋大学より、大学文書館の業務・施設視察のため来館。
- 11/28 二谷信太郎氏より、三高歌集寄贈。
- 11/28 西山、東京藝術大学アーカイブセンター主催「芸術・文化情報とオープンデータ -創造・研究と社会のためのアーカイブ」において「大学アーカイブズと「情報公開」と題して講演。
- 11/29 京都大学附属図書館より、学生運動関係資料引渡。
- 11/29 立教学院より、大学文書館の業務・施設視察のため来館。
- 12/ 2 学外より、西田幾多郎に関する照会。
- 12/ 4 西山、The 2013 RENKEI Researcher Development School in Bristol and Kyoto にもとづき、History of Kyoto University と題して講義。
- 12/ 5 西山、東海大学学園史資料センター10年史編纂企画「大学アーカイブズ座談会」に出席。
- 12/ 6 毎日放送より、企画展に関する照会。
- 12/ 6 西山、NCS 吉田キャンパス歴史ツアーで京大職員内定者に吉田キャンパスを案内。
- 12/ 7 学外より、山内得立に関する照会。
- 12/10 学外より、学徒出陣に関する照会。
- 12/10 学内より、李登輝に関する照会。
- 12/11 学外より、蜷川虎三に関する照会。
- 12/12 佐山豊子氏より、第三高等学校関係資料寄贈。
- 12/13 大学文書館教員会議。
- 12/17 西山、福家、学徒出陣関係者に聞き取り調査（於・奈良市）。
- 12/19 金子貞二氏より、西田幾多郎関係資料寄贈。
- 12/24 学外より、学徒出陣に関する照会。
- 12/25 服部浩氏より、服部峻治郎関係資料寄贈。
- 12/26 学内より、学生集会所に関する照会。
- 2014年
- 1/ 6 学外より、学生運動に関する照会。
- 1/ 9 荒木徹氏より、荒木逸夫旧蔵講義ノート寄贈。
- 1/11 天理大学より、展示および大学文書館施設見学のため来館。
- 1/14 学外より、理学部シラバスに関する照会。
- 1/14 学内より、京大建築図面に関する照会。
- 1/15 三谷敏一氏より、学徒出陣関係資料寄贈。
- 1/16 学外より、折田彦市像に関する照会。
- 1/17 大学文書館教員会議。
- 1/17 西山、福家、学徒出陣関係者に聞き取り調査（於・奈良市）。
- 1/20 読売新聞社より、企画展につき取材。
- 1/21 学外より、学徒出陣に関する照会。
- 1/21 学外より、祖父の在籍に関する照会。

- 1/21 学内より、総長式辞に関する照会。
- 1/22 学外より、時計台に関する照会。
- 1/23 馬場博一氏より、学徒出陣関係資料寄贈。
- 1/23 学内より、医学部教授に関する照会。
- 2/ 3 学外より、吉田南構内の正門・門衛所に関する照会。
- 2/ 5 河合良一郎氏より、河合十太郎関係資料寄贈。
- 2/ 7 東京大学より、大学文書館の業務・施設視察のため来館。
- 2/ 7 学外より、三高同窓会に関する照会。
- 2/13 大学文書館教員会議。
- 2/14 濱田浩氏より、濱田耕作・敦関係資料寄贈。
- 2/18 NHK 大阪放送局より、制帽に関する照会。
- 2/19 大学文書館運営協議会。
- 2/20 学外より、理学部動物学研究室別館に関する照会。
- 2/24 学外より、折田彦市像に関する照会。
- 2/24 学内より、京大俳句に関する照会。
- 2/25 学外より、京大文学部留学生に関する照会。

- 2/25 学外より、学徒出陣に関する照会。
- 3/ 4 菅野美奈氏より、第三高等学校関係資料寄贈。
- 3/ 4 企画展「京大教員たちの留学体験 ―明治・大正期を中心に―」開催（於・百周年時計台記念館歴史展示室、～6月1日）。
- 3/ 4 学外より、学徒出陣に関する照会。
- 3/17 International Centre of the Roerichs(ICR)より、エドウィン・ライシャワーに関する照会。
- 3/18 東海大学より、大学文書館の業務・施設視察のため来館。
- 3/21 『京都大学大学文書館研究紀要』第12号発行。
- 3/24 奈良国立博物館・国立西洋美術館より、大学文書館の業務・施設視察のため来館。
- 3/26 大学文書館教員会議。
- 3/31 中井正一関係資料の公開開始。
- 3/31 オフィス・アシスタント池田さなえ退職。
- 3/31 大学文書館ホームページのリニューアル。

📖 ホームページをリニューアルしました 📖

2014年3月31日に、大学文書館のホームページがリニューアル致しました。

(旧 URL) <http://kua1.archives.kyoto-u.ac.jp/ja/index.html>



(新 URL) <http://kua1.archives.kyoto-u.ac.jp/ja/>

新しい URL への再登録をお願い申し上げます。



学徒のテロル

—血盟団事件余聞—

京都大学大学文書館助教 福家 崇洋

血盟団事件をご存じだろうか。満州事変後の1932年2月から3月にかけて、日蓮宗の「布教師」井上日召を中心とするグループが「一人一殺」を掲げて「特権階級」を暗殺していった事件である。この事件は従来のテロルとは異なる特徴を持っていた。それは現役の帝大生が荷担していたことである。

「血盟団」には茨城、東京、京都の各グループがあり、東京組に東大生4名（池袋正八郎、四元義隆、田中邦雄、久木田祐弘）、京都組に京大生3名（田倉利之、星子毅、森憲二）が居た。実行の主役は茨城組（古内栄司、小沼正、菱沼五郎、黒澤大二）である。1930年に井上、古内、小沼、黒澤、海軍軍人らが鹿島神宮境内で「血盟」したとされ、これが「血盟団」名の由来となる（事件後に木内曾益検事が命名）。

京都組は茨城組とそれほど交流はなく、東京組とは以前から繋がっていた。京都組をまとめる田倉利之は、七高時代に敬天会に属し、同級生の久木田と活動するなか、先輩の池袋や四元、菅波三郎陸軍中尉、井上日召らと知り合う。

彼らとの交流は、田倉の京大入学後（1931年4月、文学部史学科）も続き、同年秋の十月事件（陸軍主導のクーデター計画）の一端を期せずして担った。上京した田倉は井上、久木田らと相談のうえ、田中邦雄と共に元老西園寺公望の暗殺を引き受け、帰京後に清風荘（京大付近の西園寺別邸）を伺ったり、同級生の東伏見邦英伯爵に西園寺への紹介を頼んだりした。しかし、この計画は途中で変更されて実行には至っていない。

十月事件後の田倉は、国家改造の同志を求めて、学内の猶興学会（江藤夏雄〔江藤新平の孫、経済学部〕を中心に1926年結成）に属し、ここで森憲二と星子毅（いずれも法学部）に出会う。田倉を介して、二人が東京の

同志と繋がるのは時間の問題だった。

事態が動くのは1932年2月初めである。東京の久保田から3人に上京を促す手紙が来た。田倉は東京で井上日召と面談し、三井財閥の團琢磨男爵の暗殺が決まった。しかし、小沼正が井上準之助前蔵相を暗殺した9日晚、井上日召から田倉に牧野伸顕宮相を四元と共に狙うよう告げられる。田倉は官邸前のホテルで待機して牧野暗殺の機を伺っていたが、やがて四元の指示で帰京の途に着いた。

間もなくして井上から京都組に新たな標的が伝えられた。関西遊説中の若槻礼次郎（立憲民政党総裁）である。土地勘のある森憲二が刺客に選ばれたが、彼は目前の若槻を撃てなかった。京都に若槻が訪れた時も京都組は機を逸している。面目を失った田倉はひとり上京し、再び若槻を狙ったが果たせず、菱沼五郎が團琢磨を射殺した日（3月5日）の10日後に東京で逮捕された。

この事件を受け、田倉は3月末に一身上の都合で京大に休学願（4月1日～翌年3月）を出した。しかし、復学することなく1933年3月に退学を願い出た。京大当局も事件の対応に追われ、1932年11月と翌年3月の評議会で「血盟団」に関与した学生の状況が報告された（『評議会議事録 自昭和七年七月昭和九年六月 5』01A00625）。

翌年秋、東京地裁で田倉に懲役6年、森、星子に懲役4年の判決が言い渡された（未決勾留500日）。公判陳述で田倉は、「革命」の捨石たらんとしたが「観念的」だったこと、家族との「骨肉の恩愛」を断ち切ることができなかったことを告白した。

その後慣れぬ獄中で病を背負った田倉は、1935年3月に静岡病院で息を引き取った。30に満たぬ短い生涯だった。